

機関番号：35305	
研究種目：基盤研究（B）	
研究期間：2007～2010	
課題番号：19320069	
研究課題名（和文）	国内地域間コミュニケーション・ギャップの研究—関西方言と他方言の対照研究—
研究課題名（英文）	Research on the communication gap between domestic regions : contrastive study between Kansai and the other dialects
研究代表者	
	尾崎 喜光 (OZAKI YOSHIMITSU)
	ノートルダム清心女子大学・文学部・教授
研究者番号：10204190	

研究成果の概要（和文）：移住先の言葉をどう感じているか等を中心的な内容とする半構造化インタビューを、関西方言と他方言とを対照する形で実施した。また、上記のインタビュー調査において、移住先の言葉として繰り返し指摘された表現や言語行動が、当該地域において現在のどの程度用いられているかを数量的に把握するためのアンケート調査を実施した。特定の観点から両調査のデータを分析した結果については学会で口頭発表した。また、アンケート調査の研究成果については冊子体の報告書としてまとめた。

研究成果の概要（英文）：How do the immigrants feel the dialect which is used in the area where they are now living? We conducted the half-structured interviews on such an experiences, contrasting the Kansai and the other dialects. To understand how the comments appeared in the interviews are general, We conducted the questionnaire survey. Analyzing the both data from a specific viewpoint, we reported some results at the academic meeting. The results of the questionnaire survey were brought together as a report of the booklet body.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2008年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2009年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	13,700,000	4,110,000	17,810,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：言葉の地域差、コミュニケーション・ギャップ、関西方言、方言接触、対照研究

1. 研究開始当初の背景

コミュニケーション・ギャップの研究は従来異言語間において行われてきたが、同一言語内の異なる方言間にも見られる現象であると考え、それを明らかにしようとした。

2. 研究の目的

国内での移住等により異なる方言に接したとき、その言葉や言語行動をどのように感じる傾向があるか、逆に移住先の人々から自

分の言葉や言語行動をどのように受け止められたかについて、主として違和感（コミュニケーション・ギャップ）という方向から明らかにする。

3. 研究の方法

移住元と移住先の組み合わせは全国に無数にあることから、本研究では関西地域（関西方言）を軸とし、それと他地域（他方言）との対照により傾向性を明らかにすることとした。

まず、人々がどのようなことを感じているのかを広く把握するために、半構造化インタビューを行った。その結果をふまえ、当該地域での現在の言語使用状況を数量的に把握するためのアンケート調査を実施した。

4. 研究成果

移住先の言葉をどう感じているか、逆に自分の言葉を移住先の人に別の意図で受け取られたことはないか等を中心的な内容とする半構造化インタビューを、関西方言と他方言とを対照する形で実施した。下記の計 185 人から回答を得た。（「→」の左側は出身地、右側は移住先）

関西→首都圏 : 28 人
首都圏→関西 : 22 人
関西→名古屋市 : 35 人
名古屋市→関西 : 10 人
関西→広島市 : 26 人
広島市→関西 : 10 人
関西→福岡市 : 33 人
福岡市→関西 : 21 人

上記のインタビュー調査において、移住先の言葉として繰り返し指摘された表現や言語行動が、当該地域において現在どの程度用いられているかを数量的に把握するためのアンケート調査を実施した。下記の計 1,021 人から回答を得た。

東京都(区部) : 202 人
名古屋市 : 205 人
大阪市 : 204 人
広島市 : 205 人
福岡市 : 205 人

特定の観点から両調査のデータを分析した結果については学会で口頭発表した。また、アンケート調査の研究成果については冊子体の報告書としてまとめた。

半構造化インタビューでは個別の言語形式よりもむしろ言語行動に関する反応が多く得られた。しかし、アンケート調査の結果によると、言語行動についての地域差は予想に反し顕著ではなかった（その原因については現在検討中）。一方、言語形式の地域差は顕著に見られ、インタビュー調査で得られたコメントの背景を今後考察する上で有益な情報が得られた。

その言語形式の地域差について、(1)間投助詞・終助詞「な」の使用、(2)非丁寧体の間投助詞「ね」の目上への使用について分析したところ、次の知見が得られた。

(1)間投助詞・終助詞「な」の使用

①否定的評価

間投助詞・終助詞の「な」は、関西では男女に関わりなく日常的な表現として用いられている。しかし、「ね」等との関係で「な」が優勢でなく、「な」が使用される場合も男性に傾く地域から移住した者にとっては、とりわけ関西の女性が使う「な」は、ぞんざいなニュアンスや男性的なニュアンスで聞こえる場合がある。インタビュー調査で得られた反応の一部を示すと次のとおりである。

- ・「何か分かんないことあったら聞いてね」という感じの「～してな」の「な」は、関東の感覚からすると男の子の「～しろよ」とニュアンスがかぶって聞こえる。間投助詞「な」も、男性が使う言葉のように聞こえてしまい、最初は女性らしい印象がなかった。(10～20代・女性・埼玉県/東京都⇒京都市2年)
- ・初対面のおばさんに道を聞いたとき、「あんなあ、この道をな」のように言った。地元では「ね」を使うので、「あんなあ」のように「な」を使うと、ぐっと近い感じになった気がした。初対面なのにも思った。男性であっても初対面なら、ちょっと近い感じがする。地元では女の子は「ね」を使うので、大阪の女の子が使う「な」は少しがさつな印象を受ける。(20代・女性・愛知県/高知県⇒大阪9ヶ月)
- 女性言葉が男性的に聞こえてしまう点と、対人的距離が近すぎるように聞こえてしまう点がポイントのようである。
- このうち前者については、関西出身者自身の中にも、同様の意識を持つ者がいる。反応の一部を次に示す。
- ・出身の伊丹市では、女性はだいたい「ね」を使っている。高校時代に大阪に出てきて、女性が「な」を言うのを聞き、汚い言葉を使うと思った。(50代・男性・兵庫県⇒東京都26～27年)
- ・広島の子は「ね」を使う。広島で「な」を使うときつく聞こえてしまうのではないかと思い、いつのまにか「な」を使わなくなった。実際に「な」がきついと言われたこともある。嫌われたくない、きつく思われたくないと思う相手には、「な」ではなく「ね」を使うようにしている。今「な」が使えるのは、関西出身者に対してくらいである。(20代・女性・和歌山県⇒東広島市3年)

②非否定的評価・肯定的評価

しかしその一方、関西の「な」を上記のように感じない人もいる。反応の一部を次に示す。

- ・「な」は女性同士で使うと思う。「な」は優しく感じられ、男性っぽく感じるということは全くない。(50代・男性・秋田県/東京都等首都圏⇒大阪2年)
 - ・「な」はかわいいと思う。男っぽいとは感じない。(20代・女性・東京都等⇒芦屋市6年)
 - ・関西の女性の「な」が男性っぽく感じることはない。東京では「さ」、関西では「な」だと思っている。(50代・男性・福岡県/全国各地⇒京都市21年)
- 全体として、関西への移住者による「な」の評価は分かれる。

③各地の「な」の使用者率と評価意識

間投助詞・終助詞の「な」は、各地でどの程度の割合の人が使っているのか。また、その評価意識はどうであるのか。アンケート調査では間投助詞の場合について、「それでな、あのな」という語形を提示し、回答者自身の使用と、男性が使った場合/女性が使った場合の評価意識を質問した。使用者率は図1のとおりである。

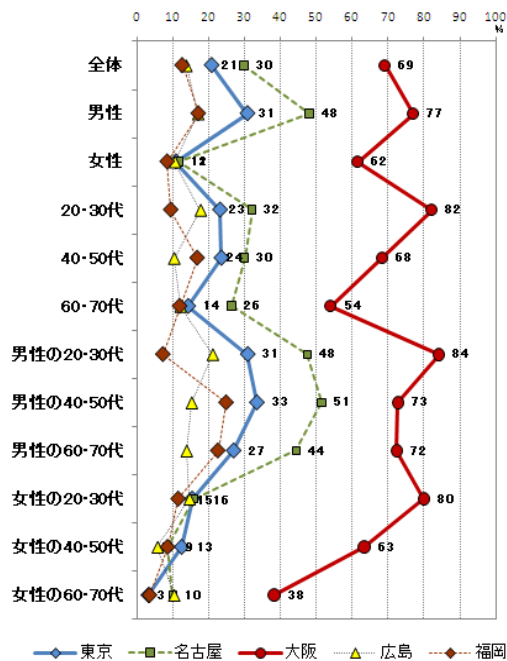


図1 間投助詞「な」の使用者率

大阪での使用者率は約7割であり、他の4地域と比較して数値が大幅に高いことが確認される。また、大阪以外では男女差が著しいのに対し（使用者は男性に傾く）、大阪では女性も6割が使用しており、8割の男性と

比較して男女差はそれほど著しくない。

「な」の使用に対する評価意識（地元で使用した場合の評価意識）は図2（男性が使った場合）、図3（女性が使った場合）のとおりである。

大阪では他の4地域よりも「ふつうの言い方だ」の数値が高く、「らんぼうな感じがする言い方だ」は著しく低い点が注目される。特に女性が使った場合は、大阪と他の4地域とで、両者の数値が逆転する。

今回の調査では、地元で使用した場合の評価意識を尋ねており、移住先の「な」についての評価意識は異なる可能性もあるが（上記のような反応）、否定的評価が見られる背景には、使用と評価における地域差が存在することが要因として大きく作用しているものと考えられる。

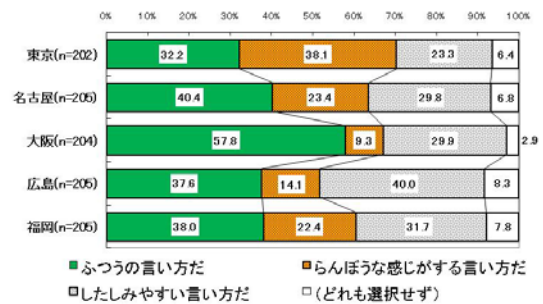


図2 間投助詞「な」を男性が使った場合の評価

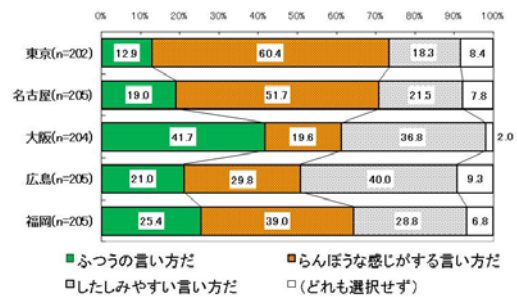


図3 間投助詞「な」を女性が使った場合の評価

(2) 非丁寧体の間投助詞「ね」の目上への使用

①否定的評価

上記に示したように、関西の女性が使う「な」について否定的評価を持つ者は、大阪出身者の中にもいる。そのことは、図3で「らんぼうな感じがする言い方だ」の数値が、他の4地域よりは低いものの、大阪にも2割いることから確認される。

その裏返しとして、大阪では「ね」が丁寧な表現だと意識されるため、目上の人に対しては単に「な」を「ね」に置き換えるだけで、丁寧語を付けずに言ってもよいと意識している者もいるようだ。インタビュー調査から、

否定的評価を伴ってそのことが語られた反応を示す。

- ・福岡に来て仕事を始めたときに感じたことだが、関西では「それでね」が上司に対する丁寧な言い方になるが、福岡では「それでですね」まで言わないと馴れ馴れしくなってしまう。そのためすぐに「それでですね」に言葉を直した。関西では「それでですね」とは言わない。普段は「それでなあ」であり、上司に対しては「それでね」と言い換える。(30代・女性・兵庫県/福岡市/関西⇒福岡市計10年)
- ・飲食店に入って店員に「これ何ですか?」とメニューについて尋ねたとき、店員が「これね」と言ったのには驚いた。もっときちんと敬語を使ってほしいと思った。その店員だけでなく、職場の後輩も、電話で先輩に対し「もしもし、〇〇ですけど。あのねー。」と言っている。その後輩だけではない。関西にはこうした言い方が多いと思う。関西の人は敬語があまりうまく喋れないと思った。敬語を使うべき相手とわりと線を引かない。(20代・女性・東京都等⇒芦屋市6年)

②各地の非丁寧体の「ね」の使用者率と評価意識

アンケート調査では、職場などの目上の人に対する「あのね、それでね」を質問した。使用者率は図4のとおり。

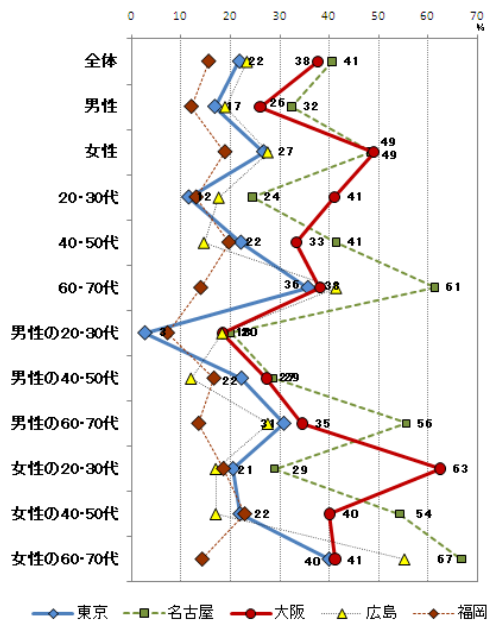


図4 非丁寧体での間投助詞「ね」の目上への使用者率

大阪でも使用者率は4割にとどまるが、東京・広島・福岡と比較すると数値は約2倍あ

り、地域差が大きいことが確認される(名古屋も数値が高い)。

この表現に対する評価意識を尋ねた結果が図5である。

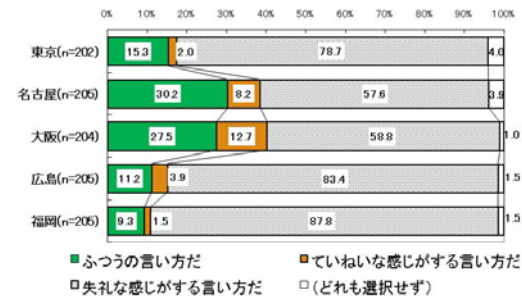


図5 非丁寧体で間投助詞「ね」を目上の人に使った場合の評価

いずれの地域でも「失礼な感じがする言い方」が多数を占めるが、大阪(と名古屋)では「ふつうの言い方」も3割見られ、他の地域と比べ数値が高い点が注目される。さらに、「ていねいな感じがする言い方」も、東京・広島・福岡では数値が非常に小さいのに対し、大阪(と名古屋)では1割ほどの点も注目される。大阪の人の丁寧語を伴わない「ね」の使用の背景には、こうした意識の違いがあると考えられる。

(1)間投助詞・終助詞「な」の使用、(2)非丁寧体の間投助詞「ね」の目上への使用を分析したところ、以上の知見が得られた。

なお、得られたデータの分析は今後も引き続き進めるが、研究成果を広く知ってもらうために、おもな結果を一般書として刊行することを計画している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

- ① 尾崎喜光、朝日祥之、井上文字、真田信治、陣内正敬、二階堂整、野山広、関西への移住者は関西の言葉をどう感じているか?—半構造化インタビュー—東京都とアンケート調査から—、第27回社会言語科学会研究大会、2011年3月19日、桜美林大学、pp. 66-69

[図書] (計1件)

- ① 尾崎喜光編、非売品、国内地域間コミュニケーション・ギャップの研究—関西方言と他方言の対照研究—、2011年、328p

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾崎 喜光 (OZAKI YOSHIMITSU)

ノートルダム清心女子大学・文学部・教授

研究者番号：10204190

(2)研究分担者

朝日 祥之 (ASAHI YOSHIYUKI)
国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授

研究者番号：50392543

(H20→H21：連携研究者)

野山 広 (NOYAMA HIROSHI)
国立国語研究所・日本語教育研究・情報センター・准教授

研究者番号：40392542

(H20→H21：連携研究者)

井上 文子 (INOUE FUMIKO)
国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授

研究者番号：90263186

(H20→H21：連携研究者)

真田 信治 (SANADA SHINJI)

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：00099912

(H19→H20：連携研究者)

陣内 正敬 (JINNOUCHI MASATAKA)
関西学院大学・総合政策学部・教授

研究者番号：70154424

(H20→H21：連携研究者)

二階堂 整 (NIKAIDOU HITOSHI)
福岡女学院大学・人文学部・教授

研究者番号：60221470

(H20→H21：連携研究者)